

昨年度を振り返って

理事長 長谷川 憲 治

平成最後の年度となる昨年度は、「いのちの電話」にとって文字通り悲喜こもごもの一年でした。「悲」の方から申し上げますと、9月には本間利雄前後援会長が、11月には古澤茂堂理事長が、そして年明けの1月には栗原浩一前事務局長が相次いでご逝去、「いのちの電話」にとって誠に重要な方々を一気に失った大変な一年でありました。

しかし同時に、「喜」の方も有りました。「いのちの電話」の課題と言えば相談員不足と財務基盤の脆弱さ、そして知名度の向上だと思えますが、幸い徐々に改善されてきております。先ず相談員ですが、現在第20期生が7名、第21期生が15名研修中でして間もなく20期生が正式に相談員の認定を受ける予定でありますし、来期には21期生が相談員の認定を受ける予定であります。そうしますと、念願であった相談員100名超の体制となり、慢性的相談員不足から脱却出来るのではないかと期待出来る状態にあります。財務基盤の強化につきましても、皆さんのご協力で二期連続して積立金を計上し、安定的な運営が出来得る状態になりつつあります。そして知名度の向上ですが、お陰様で匿名の方を含め思いもかけない方々からの寄付が増えてきておりますし、従来は評議員の三浦孝太郎さんを実行委員として頼っていた「チャリティーコンサート」も前回からは事務局や相談員そして後援会主体で開催しましたが、チケットも完売状態でした。いのちの電話の意義をご理解頂きつつある表れかと喜んでおります。

今年度は新たに事務局長として永澤孝氏をお迎えし、新体制での実質的なスタートの年となります。いのちの電話の崇高な志と意義を再確認し、更に価値ある活動を続けて参りたいと決意を新たにしておりますので、変わらぬご理解とご支援を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

いのちの電話の目的

いのちの電話は、孤独の中にあつて、時には精神的危機に直面し、自殺をはじめ、助けと励ましを求めている一人一人と、主に「電話」という手段で対話することを目的とする。